

# 南の国の「ナデシコ」税理士

成功へのキセキ

## 第28回 そばにいるよ…

「私たちの活動を一度、見に来てください。」

心魂プロジェクトを主宰する寺田さんから、病院へのデリバリーに同行して、どんな活動をしているのか、もっと自分たちのことを深く知ってほしいとお誘いを受けました。

心魂プロジェクトとは、元劇団四季のミュージカル俳優などが中心となって、重い病気が障がいのため病院で暮らす人たちに、プロのパフォーマンスをデリバリーする活動をしているNPO法人です。

私は税理士として、26名のスタッフ全員が女性だけの会計事務所を運営するかたわら、戸沢財団という、財団の運営も行っています。戸沢財団とは、亡くなったクライアントから託された遺産を使って、様々な事情で親とは暮らせない児童養護施設の子どもたちを支援している団体です。

施設で暮らす子どもたちは、18歳までは国から手厚い保護を受けられますが、高校を卒業した途端、独立して、文字どおり一人で生きていかなければなりません。一人でアパートを借り、一人で生活費を稼ぎ、世間という荒波に一人で立ち向かっていかなければなりません。

なかには、大学に行きたい、自分の夢を叶えたいと願う子どももいます。けれど彼らには、支えてくれるはずの親はいません。大学や専門学校に行くためには、施設に在る間にできるだけたくさんアルバイトをして、お金を貯め、進学のための学費や生活費を捻出するしかないのです。

戸沢財団は、そういう子どもたちのために、生活費や学費の一部を支援しています。事務的にお金を渡すだけの関係ではなく、目指しているのは、「困った時の頼れる親戚」。一度にお金を渡すのではなく、毎月、定額を振り込むことが支援の条件です。そうすることで送金時には、支援対象の子どものとなんらかのやり取りができる。少なくとも月に一度は、きちんと生活できているか、子どもの様子を見守りたいという思いからです。

また支援の条件として、半年に一度は、成績を提出してもらおう約束にしているのです、学校生活の様子も何となく分かります。

つらいことがあったり、自棄になったり、落ち込んでもう誰とも会いたくないと思っても、生活費を送ってくれる財団にだけは連絡しない訳にはいかない…。もし子どもが、道を外れ果たすことになったら、戸沢財団が最後の砦としての機能を果たすことができれば…。と、かすかに期待もしています。

それでも…。

正直、子どもとの信頼関係を築くのは、容易なことでは

ありません。彼らからしたら、私は単にお金をだしてくれる人。本当の家族のように、身を挺して、自分を守ってくれる存在とは思われていません。

実際、何かあったとしても、本業である会計事務所の仕事を放りだして、彼らのもとに駆けつけてあげることは出来ない。私は、日々の生活で精一杯で、自分の時間と体力が許す範囲内でしか、彼らと関わることはできないからです。

言い訳といわれても仕方がない…。自分にできることを、できる範囲内で、今できる限りのことをするしかないのです。

そんな風にいい聞かせてみても、想いと現実のギャップを埋めることができず、悶々とした気持ちでいたところ、タイミングを見透かしたように、心魂プロジェクトの寺田さんに誘われたという訳です。

ミュージカルのデリバリーと、一言で言っても、受け入れてくれる病院は、多くはないと思います。私たち財団の活動を受け入れてくれる児童養護施設が、なかなかないので…。

もちろん理由は、いろいろあるでしょう。日々の業務で忙しい。何かしらリスクがあるかもしれない。誰かからクレームが入るかもしれない。とくに病院の場合は、感染の危険があったり、そのために病状が悪化する可能性もあるわけですから…。

心魂プロジェクトのメンバーでもない私が、本当に同行してよいのか…。

そもそも、今回ミュージカルをデリバリーする対象である重症心身障がい児(者)に、これまで一度も触れ合ったことのない私が…。

歌を歌える訳でもない、踊れる訳でもない、楽器を弾ける訳でもない私が、彼らとどう向き合えば良いのだろう…。

千葉で一番古いと言われるこの病院には、創立から70年の歴史があるそうです。それは、長ければ60年以上の間、病院で暮らしている人がいるということの意味しているのです。

さて当日、病院の会場には、40～50名の患者さんたちが、すでに待っていらしゃいました。

車椅子に乗っている人  
ベッドに横たわった人  
目を閉じている人  
首を傾けている人  
看護師さんが介助している人  
年老いたご両親と手を繋いでいる人

## ◆筆者 原 尚美 (はら なおみ) プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本答練(現:全国公開模試)「財務諸表論」「法人税法」で全国1位の成績を収め、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性のスタッフ約30名の規模にまで成長。一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に『小さな会社のための総務・経理の仕事がわかる本』『小さな起業のファイナンス』(いずれもソーテック社)、『51の質問に答えるだけですぐできる「事業計画書」の作り方(日本実業出版社)』『トコトわかる株式会社の作り方(新星出版社)』『世界一ラクにできる確定申告(技術評論社)』『一生食っていくための土業の営業術(中経出版)』など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

ドクターが身体に取り付けられた機器の様子をチェックしている人

心魂プロジェクトのメンバーは、早速、患者さんたち一人ひとりに話しかけたり、太鼓でリズムを取ったりしています。

私は…  
私は…  
どうすれば、いいのだろう…。

彼らは、自分たちから近づいてはこれない。私の方から、歩み寄っていくしかありません。やがて、音楽が始まりました。私は歌に合わせて、手拍子をしながら、勇気をだして一步を踏み出し、患者さんたちに近づいてみました。介助をしている看護師さんの真似をして、患者さんたちの肩で、トントンとリズムを取りながら。

まったく反応のない人  
私の顔を必死でのぞき込む人  
言葉にならない声で答えてくれる人  
びっくりしたように身体を反らす人  
不自由な手で私の顔を触ろうとする人

喜んでくれているのか  
受け入れてくれているのか  
驚かせてしまったのか  
嫌がっているのか

正直、私にはわかりませんでした。それでも一つだけ、分かったことがあります。特別なことは必要ない。ただ、そばにいてだけで、いいのだということ。

「そばにいてよ」

言葉は交わせないけれど、触れる指先に、見つめる眼に、その思いを集中すれば、ちゃんと心を通わすことができましたのです。

確かに、  
確かに気持ちが通じあったのです。

心魂プロジェクトのメンバーが、よく口にする言葉があります。病院で出会った子どもたちと、次にまた会えるという保証はない。どんなに医療が発達しても、むしろ二度と会えない可能性が高い。だから自分たちは、その瞬間、常に最高の演技を届けなければならないのだ。「演技はできないけれど、最高の真心を伝えよう。」その言葉を思いだしながら、重度の障がいを持つ人たちに、心をよせました。

その触れ合いは、本当に特別な感覚でした。

何万語を費やしても、なかなか心を開いてくれない児童養護施設の子どもたちを思いました。五体満足で生まれてきて、どこか病気をしているわけではない。けれど、幼い頃に辛い体験をして、心が痛んでいる子どもたち。

彼らは、簡単には受け入れてくれません。けれど、それでも彼らに心を寄せ続けよう。何度、拒否をされても、めげずにまた、彼らと向き合える自信がついたような気がしたのです。

どんなに心を寄せても、報われないかもしれない。気持ちが伝わらず、心を開いてくれず、落ち込むかもしれない。でも、関わった子どものうち一人か二人でも、何の見返りも求めず、純粋に善意だけで、自分を大切に思ってくれる大人がいたこと、世の中そんなに悪い大人ばかりじゃないということを感じてくれたら、それでいい…。

そんな風に、思えたのです。

というわけで、今年一年、また新しい気持ちで、がんばりたいと思います！

皆さま、本年もどうぞよろしくお祈りします。

おかげさまで  
14刷

51の質問に答えるだけですぐできる  
「事業計画書」の作り方

原 尚美 著(日本実業出版社) 1,600円+税

51の質問に順番に答えるだけで、会計やマーケティングの知識がなくても、簡単に事業計画書ができる本。『ソイ・マヨ』という大豆マヨネーズの事業計画をモデルに示して説明しているので、具体的な考え方や作り方のイメージがつかめます。これから起業しようという方、新規事業を始めたい方に大いに役立ちます。

